

## 第七章 朧月夜の物語 こりずまの恋

[第一段 源氏、朧月夜に今なお執心]

\*今はとて(朱雀院ではいよいよの御入山に際して)、女御、更衣たちなど(院に仕えた女御や更衣たちなどが)、\*おのがじし別れたまふも(各自里下がりして散り散りにお成りなのも)、あはれなることなむ多かりける(物寂しくなることが多かったのです)。\*「今は」は<今は是まで左様なら>で、此処の語りは六章九段の「院の帝は、月のうちに御寺に移ろひたまひぬ」場面の朱雀院内の様子らしい。\*「おのがじし」は<各自自身>で<各々がそれぞれに>だから、与謝野文に従って「それぞれの自邸に帰る」と解す。「分かる」は<別々になる→散り散りになる>。

\*尚侍の君は(ないしのかんのきみは)、故後の宮のおはしましし二条の宮にぞ住みたまふ(故大后が住まいにしていらした二条宮邸に移り住みなさいます)。姫宮の御ことをおきては(三の宮の御心配を別にすれば)、この御ことをなむかへりみがちに(この尚侍の御身の上というものを見捨て難く)、\*帝も思したりける(法皇もお思いだったのです)。\*「尚侍の君」は旧藤原右家の六の姫で故弘徽殿大后の妹君。注には<朧月夜尚侍>と説明されるし、それが現在広く認められた仮称かも知れないが、なぜ原文にあった「有明の君」でないのか、が私には分からない。また、朱雀院では御所とは別に独立した院司管理で、女御、更衣、尚侍、それぞれが御所のままに女房抱えの体制を維持したらしく、その費用負担は公費会計を圧迫もしたようだ。なお、此処の読みはローマ字表記を参照すると、簡略した「かんのきみ」ではないようだ。「故後の宮(こきさいのみや)」は<故弘徽殿大后>。「二条の宮」は実家の旧藤原右家で、大后が母后として王籍を得たことから「宮」と言うのだろうが、この宮邸は血筋としての宮家とは違う印象だ。\*「みかど」は今上帝ではなく朱雀院のことらしい。であれば、この「帝」は<上皇>を意味するだろうし、上皇が出家すれば<法皇>と呼ばれる、かと思う。

尼になりなむと思したれど(尼になってしまおうかと尚侍君はお思いになったが)、

「かかる\*きほひには(そう事を急いでは)、慕ふやうに心あわたたく(未練がましく落ち着かない)」 \*「きほひ」は<競い>で<先を争う=事を急く>。

と諫めたまひて(と朱雀院は君を制止しなさって)、やうやう仏の御ことなどいそがせたまふ(どうにか思い留めさせて院の出家の御準備などを勤めさせなさいます)。

\*六条の大殿は(六条院源氏殿は)、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば(尚侍君が気持の上では諦めきれないまま藤原右家に仲を引き裂かれて終わった御相手なので)、年ごろも忘れがたく(長年忘れ難く)、\*「六条の大殿」は、この語り手をして源氏殿に対する客観的な呼称法のようにだが、話し運びからして朱雀院を「帝」と呼称した価値観に於いて対比させる意図を感じる。源氏殿は決して「帝」ではない。「准太上天皇」は今上帝が出生の心苦しきから源氏殿を厚遇せずにはいられない事情を反映したもので、なおかつその事情は公表できないので、実際は年俸加増と王家礼を許すの為の名目付けの宣旨に過ぎず、社会的地位ではなく身分処遇引き上げという個人に対する方便だという、読者に対する断りのように聞こえる。

「いかならむ折に対面あらむ(どういう時に会えるだろうか)。今一たびあひ見て(もう一度会って)、その世のことも聞こえまほしく(その当時のこともお話し申したい)」のみ思しわたるを

(とだけずっと思い続けていらっしやったが)、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに(互いに世間の噂も避けなざるべき立場であつて)、いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば(大変な不手際となった当時の騒動なども思い出されなざるので)、よろづにつつみ過ぎしたまひけるを(ともかくは自重して過ごして来られたが)、

かうのどやかになりたまひて(今や尚侍君はこうした長閑な一人暮らしにおなりで)、世の中を思ひ(朱雀院の御出家に世の無常を思い)しづまりたまふらむころほひの御ありさま(今更はと静かに過ごしていらっしやるだろう此の頃のお暮らしぶりが)、いよいよゆかしく(ますます気になって)、心もとなければ(会わずには気が済まず)、あるまじきこととは思しながら(不敬に当たるとは思いなさりながらも)、おほかたの御とぶらひにことつけて(季節柄などの通例のご挨拶文に託けて)、あはれなるさまに常に聞こえたまふ(朱雀院の目が無いのを良いことに、思い入れたっぷりの文面をいつもお書きなさいます)。

\*若々しかるべき御あはひならねば(恋仲だった若い時のように人目を忍ばねばならない御相手ではないので)、御返りも時々につけて聞こえ交はしたまふ(尚侍もお返事はその都度書いてお出し申しなさいます)。 \*「若々しかるべき」の「べし」は妥当性。「然るべき」は<そうあつて当然の>で、その<そう>は「若々し」で、この「若々し」は<若かりし時に隠れ会ったこと>らしい。そう解して、文意は与謝野訳に従う。で、二人が初めて情交したのは二十年前の二月に御所で花見があつた日の夜(花宴巻)だった。尚侍は右家六姫であり、時に朱雀帝に女御として入内が予定されていたが、源氏殿との恋仲が露見して、それは適わなかつた。にも関わらず、朱雀帝は六姫に執心して尚侍として入内させた。この事の運びは弘徽殿大后の主導に拠るものだったが、朱雀帝は尚侍を最も愛し、朱雀院に退位しても実質の正妻として遇した。また、右家六姫であつてみれば、その朱雀院の処遇を世間も認めたのだろう。だから、尚侍にしてみれば、源氏殿との事は過去のこと、事実として終わったこと、という認識だったので、殿の情深い文面も真に受けず、とはいへ気の利いた趣きあるお便りと好感して、それなりの礼を尽くして返事を出した、というところのようだ。尚侍は子を設けなかつたようだが、二十年といえば、生まれた赤子が次の赤子を生むに至る期間だ。ヒトの自我形成は凡そ二十歳までに定まるので、いくら年を取っても恋心自体の観念は変わらないのかも知れない。しかし二十年も経てば生活環境は変化するし、女の方は卵子の減った自己認識からして、実際の生活感が変わるほうが自然だ。生活感が変われば、自己の基本的な価値観が変わらないとしても、現実の目前にある物への見方は変わる。根拠のない私の感想だが、女は夢を見る期間が短く、そして、短い期間の夢だからこそ爆発力がある、ように思える。では、源氏殿は精子を作り続ける男だから夢を見続けるのか。いや違う。物質が保障された生活があるから夢想するのだ。精子を作り続けるためには、喰ひ続けなければならない。むしろ、卵子を喪失しても、生活が充実していなくても、女には子宝を想念として保持する精神力があるのかも知れない。尤も最近では、それは男女の差ではなく、社会性の備わつた親に育てられたかどうか重要な要素らしい、と動物園観察からの報告もあるようだ。ともあれ、理想の実現を夢見ることと価値想念を持続することは次元の違う心だが、それが時に交差するのが人生の綾であり彩でもある、みたいなことを作者は言おうとしているのだろうか。

\*昔よりもこよなくうち具し(昔よりも格段に優雅さを備え)、ととのひ果てにたる御けはひを見たまふにも(すっかり円熟した御印象を殿はその尚侍の返書の文面に見知りなざるにも)、なほ忍びがたくて(いっそう我慢できずに)、昔の中納言の君のもとにも(かつて取次ぎを頼んだ尚侍の女房の中納言の君のもとにも)、\*心深きことどもを常にのたまふ(尚侍に深い恋心を持っていることをいつもお伝えなさいます)。 \*「昔」の尚侍は、育ちの良さや裕福さも然り乍ら、天性の明るさによ

る派手好みで、あまり後先を考えず自分に正直なお調子者だった。特に、源氏殿と遊んでいる時はその傾向が強く、それが強烈な魅力だったのかも知れない。ただ、尚侍は源氏殿に優雅さを磨かれたかも知れないが、深さに於いては私の印象では、朱雀帝に愛されてから、ぐっと女っぷりを上げたように思う。だから源氏殿の認識では、尚侍への、もしかすると女というものへの、評価対象項目は優雅さであり、深い情愛に期待していない、というか、そういう存在意義に気付いていない、ように見える。 \*「心深きことども」は<深い恋心があること>だろうか。そんな朱雀院にも尚侍にも不敬になるような話を、朱雀院の出家直後に持ち出せるものだろうか。いやしかし、それが出来る所が物語になるほどの源氏殿のだからしない執着心なのだろう。他に<深い考え>とか<深い事情>と言い換えても、中納言の君が殿から相談されるに相応しい話は在りそうも無い。

## [第二段 和泉前司に手引きを依頼]

\*かの人の兄なる和泉の前の守を召し寄せて(この女房の兄の前の和泉守を源氏殿はお呼び寄せなさって)、\*若々しく(若かった日のように近しく)、いにしへに返りて語らひたまふ(昔に返って相談申しなさいます)。 \*「かの人の兄なる和泉の前の守」は注に<中納言の君の兄の前和泉守。>とある。「かのひと」は中納言の君のことだから、「かの人の」は<この女房の>。「兄」は「せうと」との読み。「和泉の前の守(いづみのさきのかみ)」は<和泉国の前の国司>を少し略した言い方だ。今の略し方だと<前和泉守>。「和泉国」は今の大阪府南部。名家に管理委任されるという畿内の中でも最も小さな区画分限で、農業領地としての生産高は多くを期待できないから、古くからの水利要所およびそれによる商業集積が細密な管理業務を組織させたと推測できる。この人の家柄は中納言を輩出した藤原右家筋の良家だったような気がするが、家勢がいくぶん衰退気味のところを源氏殿や左家が引き上げに手助けしたのかも知れない。ともかく、源氏殿から一定の信頼は得ているのだろう。 \*「若々し」は<若やいでいる>ではなさそうだ。先にも「若々しかるべき御あはひ」という言い方があり、その「若々し」は<若かりし時>の意味だったが、此处でもその意味合いの語用だろう。ただ、下に「いにしへに返りて」とあるので、わざわざ「若々しく」を言う意図は<互いに若かった時のように>という、昔からの近しい間柄を示しているように見える。

「人伝てならで(御簾越しに女房を介してではなしに)、物越しに\*聞こえ知らすべきことなむある(几帳越しに直接尚侍にお知らせ申したいことがあるのです)。\*さりぬべく聞こえなびかして(上手く話し効かせて)、いみじく忍びて参らむ(ごく内密に参上しようと思います)。 \*「聞こえ知らすべし」の「べし」は強い意志を示す助動詞。だから、これを<お知らせしなければならぬ、お知らせ申せずにはいられない>と言い換えても文意には沿うと思うが、話の中身が恋心なのを承知した者への相談ごとなのだから、やはり<お知らせ申したい>が分かり易い。 \*「さりぬべし」は古語辞典に<「さありぬべし」の約>と解説がある。「さありぬべし」は<きつとそうならしめるように=効果的に=上手く>。しかし、「さりぬべく」と言われても、殿が好意を持っているので会って話だけでも聞いて上げてくれ、という内容の言伝になるわけで、源氏殿の言う「聞こえなびかして忍びて参らむ」に応じて前和泉守という地位の人が、即ち地位を賭けて、尚侍の側近の兄という人間関係に基づいて動くという事の意味を考えれば、尚侍もそれこそ子供じゃないのだから、この言伝が実質では<出向くのでよろしく>という殿の予告を断るものであることぐらいは悟り、前守も当然にそれを弁えるわけで、朱雀院の出家中に実質の正妻たる尚侍に六条院が忍んで会う、という段取りを進めるのは、いくら若い時の話を持ち出されて仲間意識の共感を誘われても、いや若い時の殿の失敗を思えば尚更かも知れないが、前和泉守は是を何処か後ろめたく気が引ける役回りに感じたのではないだろうか。

今は(今の私は)、さやうのありきも所狭き身のほどに(そうした忍び歩きも難しい身なので)、

おぼろけならず忍ぶれば(ある程度ではなく嚴重に秘密にしなければならないが)、そこにもまた人には漏らしたまはじと思ふに(そなたも他の人には漏らしなさるまいと思えば)、\*かたみにうしろやすくなむ(互いに有意義なのかと) \*「かたみにうしろやすくなむ」は下に<思ひはべる>などが省かれている。それにしても、六条院ほどの地位の人にこういう言われ方をしては、前和泉守にとっては「そこにもまた人には漏らしたまはじ」は命令そのものであり、それも簡潔な指示ではなく、持って回った言い方なので広い範囲の責任を負わされたような重さがある。注には<『完訳』は「互いに安心。裏に無事遂行してくれれば、あなたの国司就任を斡旋しよう、の意が含まれるか」と注す。>とある。具体的な内容は不明だが、確かに何かの裏約束はあって然るべきだ。それほどの、難しく厭な役回りかと思う。

とのたまふ(と仰います)。

\*尚侍の君(尚侍君はこの話を中納言の君からお聞きになって)、 \*「尚侍の君」は此处では「かんのきみ」と略されるようだ。また、与謝野訳文に「そのお話を中納言の君から聞いた時に、尚侍は」と中納言の君から聞いた>と補語してある。従いたい。前和泉守が直接に尚侍に訴えることなど出来よう筈がないし、このような秘密の話に人を介すことも出来ない。唯一、秘密を守れて、尚侍と直接に話が出来るのが妹である女房の中納言の君だ。女房の兄を使者に立てるというのは、朱雀院が三の宮の乳母の兄である左中弁を六条院への使者に立てたこと(二章一段、七段)に似た筋だが、決定的に違うのは、左中弁に然程の秘匿が課されていなかったことに対して、前和泉守には嚴重な秘匿が課されていることだ。が、何れにせよ、こうした記事は女房取次ぎの具体的な一形態が示されているようで、当時の事情に不案内な私には、ある程度分かり易い経過説明になっている。ただ、女との連絡に兄妹や姉弟を利用するのは、空蟬の弟の小君の例や学生君が五節舞姫の弟に手紙を託した例など、ずいぶん印象的に描かれて来ているし、そういう関係性で広がる人間関係は通常の事で、およそ人間関係は知り合いの知り合いを介して広がることで信用性が担保されている。

「いでや(いえ今更は)。世の中を思ひ知るにつけても(男女の仲の信義の大切さを思い知ったので)、昔よりつらき御心を(昔から薄情な殿の御心を)、ここら思ひつめつる年ごろの果てに(幾度も思い積み重ねてきた年月を経た後で)、あはれに悲しき御ことをさし置きて(真心を以て愛して下さった朱雀院の悲願の御出家を他人事のようにして)、いかなる昔語りをか聞こえむ(六条殿と親密に、どんな昔話が申せましょう)。

げに(確かに皆が秘匿を守り)、人は漏り聞かぬやうありとも(誰にも漏れ知られぬようであったとしても)、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ(自分の心に問えば、それこそ実に恥づべきことです)」

と\*うち嘆きたまひつつ(と思わず情けなくなりなさって)、なほ(いっそう頑なに)、さらにあるまじきよしをのみ聞こゆ(断じてお断りする旨だけをお返事申します)。 \*「うち嘆く」のは、尚侍が中納言の君の話から、殿の来訪予告を知って、まさか朱雀院が出家した後で六条殿が忍んで会いに来るなど、夢でこそ楽しめても、実際にそうになったら自分の信義が立たないので<情けない>のだろう。

### [第三段 紫の上に虚偽を言って出かける]

「いにしへ(過去の)、\*わりなかりし世にだに(私が無理に犯した時でさえ)、心交はしたまはぬことにもあらざりしを(心を開きなさらない訳でもなかったのに)。 \*「わりなし」は<無理だ、道理が立たない、筋が通らない>。光君は六姫を、誰とも確かめずに行き成り小部屋に連れ込んで抱いた(花宴巻)のが二人の仲の始まりだ。姫に騒がれぬように光君は一応身は明かしたものの、付き合う前に何の手順も踏んでいないし、ほぼ強姦のようなものだった。が、六姫はその後も光君との逢瀬を楽しんだ。だからといって、光君の強引さが全ての始まりだったことに変わりはない。

げに(確かに)、背きたまひぬる御ためうしろめたきやうにはあれど(御出家なされた院に対してはうしろめたいようではあるが)、\*あらざりしことにもあらねば(初心なオボコじゃあるめえし)、今しもけざやかにきよまはりて(カマトト宜しく白切って)、立ちにしわが名今さらに(流した浮名今さらに)取り返したまふべきにや(貝を吹いてもボラ違い)」 \*「あらざりしことにもあらねば~今さらに取り返したまふべきにや」とは何たる言い草か。是では丸で、改心して生きようとする前科者を再び犯罪に巻き込む輩が、悪党はどうせ悪党だ、と言い放つと同じではないか。黙阿弥も真っ青の白浪物の趣き。本当に凄い台詞だ。上品な貴族言葉だけに、その非道ぶりが際立つ。兄帝への入内が予定されていた右大臣家の六姫を寝取って、それが元で、当時の権勢家の右大臣家筋から公職追放され、いっそうの迫害を避けるために須磨へ退去したものの、諸般の事情から兄帝に朝廷に呼び戻され、現在の荣誉ある地位に至る、というのに、再び兄を裏切るとは。光源氏という男は生来の外道だ。能く「英雄色を好む」と言うが、それは、いくら人間が社会的生物だといっても、その組織構成因子たる各個の有機生命体の生命力、力強さ、逞しさこそが現実を形作るという価値観を示す言い方、だと思うが、この人の場合は「色を好めばこそその英雄」と言うべきか。この人は、その文化教養と美形に飛び抜けた高い能力があり、それを以て王家の選民性を体現し、以て威光を保ち、且つ産腹の悪さから臣籍降下して財政実務を管理し、二代目以降は飾り人形となる象徴天子家に自立の誇りを少し呼び戻した。それは正しく、統一領主王家と荘園領主藤原氏との抗争だが、中央集約権限を以てする土木開拓で生産性が高まる国造りの時代と、一定の国体下で各生産主体が生産性を競う成長の時代とでは、求められる管理者の役割が違ふ。権威象徴が一定規模の国家構想の骨格形成の道標として光っている間は政治は官僚がその実施調整をすれば良い。が、骨格形成が進み各部各所での生産工夫こそが光り出して生産性が向上したら、調整役たる朝廷権威代理者の官僚はもはや不要で、各自が事業主として生存競争を生き抜くしかない。斯くして、明らかに王家は実務担当からは外れる。が、権威象徴は光が鈍っても国体の維持に責任を果たさなければならない。それは、具体的には国内に於ける一定の生活水準の維持を意味する。国税活用を謀る政治は、開拓調整から成長維持へと目的が変わる。この時、成長は各生産者の主体努力が担うので、その活力維持は各主体の価値観に基づくから、合意形成が必要となる。そしてまた、止む無く戦が起こる。望ましいのは折衝による無血決着だ。その日常的な仕組みが議会政治の一つの説明方法だろう。政治は予算決定であって、合意の為の議論は過程に過ぎない。多数決は戦争だ。ところで、象徴は政策実務に携わっては神聖を失うので、王家は滅びるか、文化人として生き残る他に道は無い。にも関わらず自立を画策すれば、有力者を利用すべく奇術を弄して諸侯の目を眩ませて、その一瞬の間隙を縫って権力の座を奪う以外にない。裏方たる身内に犠牲が出るのは止むを得ない、王家の自立自尊という大儀の為だ、と言う正当性が光君自身にはあるらしい。とはいえ、これほどの悪業を重ねて勝利者顔をしている、というのは、やはりこの物語は不思議な話だし、実相だとすれば、世の中は実に奇怪だ。

と思し起こして(と思い切って)、この\*信太の森を道のしるべにて参うでたまふ(この前和泉守を案内役にして二条宮邸にお出向きなさいます)。 \*「信太の森」は「しのだのもり」と読みがあり、注に

「和泉なる信太の森の葛の葉の千枝に分かれて物をこそ思へ」（古今六帖二、一〇四九）。「信太の森」は和泉の国の歌枕。和泉前司を道案内にの意。>とある。随分と風流を気取った言い回しで、殿の浮かれ気分を示すのだろうか。ただ、言い換えでは意味を拾って、言い回しの味わいは原文だけのものと降参する。ところで、「信太の森」をWeb検索すると大阪府和泉市葛の葉町2丁目の「信太森神社」がヒットし、その神社のホームページには御神木が「千枝の楠」だと説明されているようが、異説もあるらしく、他の幾つかのページを参照した所、信太森神社は由緒はともかく実質で神社形成が整ったのは江戸時代以後という解説もあり、その形成背景が竹田出雲の当たり狂言の「葛の葉」(1734年)だという指摘がWikipedia他にあった。「葛の葉」狂言は陰陽師の阿倍野清明の生母がキツネの化身の葛の葉姫だったという設定とのことで、それはそれで面白そうな話題だが、今は煩雑なので触れない。引歌に言う「和泉なる信太の森」は当事流行った熊野詣(多分、紀伊の熊野三山を霊山とする御利益の触れ込みと旅行消費満足感の相乗価値に拠る)の一つの道標地点として広く認知された地名、だったようだ。正に「道のしるべ」。また、「葛の葉」は裏が白くて葉脈が面白い。裏を見る、裏見は恨み、そして占いだ。となると、「千枝に分かれて物をこそ思へ」は<散り散りに思い悩む>という恋心のようなのだが、占いの<知恵で考えて先のことを決めよう>という博打打ちの洒落言葉にも見える。我ながら白浪に捉われ過ぎているのかも知れない、とも思うが、この段の殿の凄み、というか凄みのある演出、はいつになく異色だ。

\*女君には(殿は東の対の自室で夫人の紫の上に)、 \*注には<紫の上をいう。>とある。であれば、対の上、とも、上、とも呼称するこの人を、何故此处で「をんなぎみ」と呼ぶのか。「君は心の妻だから」という殿の気持ちを表しているのだろうか。与謝野文では「夫人の女王」とあり、その意図を汲んでいるようだ。従いたい。ただ、作者はその意図も含めた場面描写を作為してのこの語用なのだろう。

「東の院にものする\*常陸の君の(二条東院に住まう常陸君が)、日ごろわづらひて久しくなりにけるを(このところ寝込んで久しいのを)、もの騒がしき紛れに訪らはねば(婚儀などの騒ぎに追われて見舞わずにいるので)、いとほしくてなむ(お気の毒です)。昼など(日中などは人目の手前)、けざやかに渡らむも便なきを(其相応の格式張った行列で出かけるのも物々しくて厄介なので)、夜の中に忍びてとなむ(夜の暗い内にこじんまりとひっそり出向こうと)、思ひはべる(存じます)。人にもかくとも知らせじ(向こうにも特には知らせません)」 \*「ひたちのきみ」は<末摘花>。そうか、こういう安全牌としての使い道もあるのか、と納得しそうになったが、さすがにそれは、あまりにも見え透いた言い訳だったとの語りが下にあるので、何れ末摘はデモノらしい。

と聞こえたまひて(と申しなさって)、いといたく心懸想したまふを(それはもうそそくさと落ち着きなくいらっしゃるのを)、例はさしも見えたまはぬあたりを(いつもはそのような態度にも見えなさらぬ東院訪問を)、あやし(嘘だろう)、と見たまひて(と上は思いなさって)、\*思ひ合はせたまふこともあれど(このところの尚侍君からの文遣いの多さに、行く先は二条宮邸かと思ひ当たる節はあったが)、姫宮の御事の後は(姫宮の御迎え入れの後は)、何事も(上は殿との御夫婦仲は何事も)、いと過ぎぬる方のやうにはあらず(もう今までのような率直さではなく)、\*すこし隔つる心添ひて(少し距離を置いた心が付いて)、見知らぬやうにておはす(気付かない風を装って、知らん顔をしていらっしゃいます)。 \*「思ひ合はせたまふこと」は注に<紫の上、源氏と朧月夜の文通を聞き知っている。>とある。殿の手紙は表向きは御見舞い文で、尚侍君からの返書も忍びではなかつただろう。それと、二条東院の末摘は常陸宮姫なので、二条宮邸との洒落言葉になっているのかも知れない。また、此処に来て末摘が、本人の登場はないが、俄かに引き合いに出されるのも、その特異な存在感に均衡が崩れる胸騒ぎを覚えるのは作者の計算だろうか。 \*「すこし隔つる心添ひて」は注に<紫の上の変化。夫婦に仲に亀裂が入った。源

氏はそれに無頓着。>とある。与謝野文は此处の文意を「以前のように思うことをすぐに言う習慣も女王は改めていて」としてあって、喪失感を実感する名訳だ。が、そういえば、期待外れの三の宮ながら六章八段に「御いらへなどをも、おぼえたまひけることは、いはけなくうちのたまひ出でて、え見放たず見えたまふ。」と、その率直さだけは殿が愛でていたことを思うと、殿と上の溝の深まりが思い遣られる。

#### [第四段 源氏、朧月夜を訪問]

その日は、寝殿へも渡りたまはで(寝殿の姫宮のお部屋にもお渡りなさらず)、御文書き交はしたまふ(所要がある旨のお手紙を書き交わしなさいます)。薫き物などに心を入れて暮らしたまふ(が、その実は、お出掛け用の着物に香を焚き染めさせることに熱中して過ぎなさいましたのです)。

宵過ぐして(日が落ちて暗くなると)、睦ましき人の限り(ごく側近の者に限って)、四、五人ばかり(五人ほど従えて)、網代車の(軽装の網代車の)、昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ(昔よく遊び歩いた覚えのある目立たない様子でお出掛けなさいます)。

和泉守して(二条宮邸には前和泉守をして)、御消息聞こえたまふ(ご来訪の口上をお知らせ申しなさいます)。かく渡りおはしましたるよし(六条殿がこのようにお見えになったことを)、\*ささめき聞こゆれば(前守が静かにお伝え申すと)、驚きたまひて(取り次いだ中納言の君から知らされた尚侍は驚きなさい)、\*「ささめき聞こゆ」の主語は前和泉守で、この人が口上の使者を務めるということは、取次ぎ女房は妹の中納言の君なのだろう。「中納言の君」は与謝野文では補語の明示がある。

「あやしく(おかしい)。いかやうに\*聞こえたるにか(私がきっぱりとお断りした返事を、前守はどのように殿に申し上げたのか)」 \*「聞こえ」の主語は和泉守。と注にある。

とむつかりたまへど(と憤りなさいましたが)、

「\*をかしやかにて帰したてまつらむに(兄の言い間違いだからと笑い話にしてお帰り頂くには)、いと便なうはべらむ(殿自らのお越しでは子供の遣いと違って、とても相済まぬ事と存じます)」 \*「をかしやかにて」は<笑って済ます>、かと思う。「聞こえたるにか」という前守に対する尚侍の非難を、中納言の君は妹として取り成す、ということなのだろう。

とて(と中納言の君は)、\*あながちに思ひめぐらして(都合の良いように理由をこじつけて)、入れたてまつる(殿を御部屋にご案内申し上げます)。\*「あながち」は<無理矢理、強引>という意味の語用が多いが、原義は<己勝ち=自分勝手>と古語辞典に説明されている。

御とぶらひなど聞こえたまひて(殿は中納言の君を介して尚侍に朱雀院のご出家に伴うお引越を労わる表向きの御来意を申しなさい)、

「ただここもとに(少し近くに、御出で下さいませんか)、物越しにても(物越しででも、直にお話し致したく存じます)。さらに昔のあるまじき心などは(すっかり昔の向こう見ずな心などは)、\*残らずなりにけるを(残っていませんので)」 \*「残らずなりにけるを」はドンダケものの厚顔ぶりだ。その気がさらさら無いのなら、そも此処に来ていないだろうに。よく言うし、よくも言わせたものだ。尚侍も

芯から堅い女なら、女房が殿を部屋へ通してしまっても、自分が部屋から出て行くぐらいの拒否を示すだろう。空蟬も藤壺も、時にはだが、殿の強引さを断固拒んだ。今の尚侍は殿を断固拒んでも礼を失しない。というのに、この甘い応対。この二人はどうにも、蜜の味が好きらしい。

と、\*わりなく聞こえたまへば(むやみに申しなさると)、いたく嘆く嘆くゐざり出でたまへり(尚侍君はととてもためらいがちにゆっくりと膝を進めて出ていらっしやいました)。\*「わりなし」はくわけも無しに>で、今でも「わけも無く泣く」と言えばくむしように泣く、とにかく大泣きする>という意味だ。

「さればよ(やはりな)。なほ(今でも)、気近さは(気安さは、変わらない)」と(と殿は)、\*かつ思さる(尚侍の口と心は違ふと思ひなさいます)。\*「かつ」はく一方では▲だが、他方では△だ>という言い方のようだ。で、「△」がく気安さが昔と変わらない>だから、「▲」はく今は口では拒んでいる>だ。

かたみに(互いに)、おぼろけならぬ御みじろきなれば(良く知った相手の身動きの御気配なので)、あはれも少なからず(感慨も浅くはない)。東の対なりけり(尚侍の御部屋は東の対なのでした)。辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて(殿を東南の廂に御案内申し上げて)、御障子のしりばかりは\*固めたれば(母屋の御襖戸を隙無くピシッと閉め切ったので)、\*「固む」はく堅く守る>だから施錠でもしたのかと思つたが、下に殿が「引き動かしたまふ」とあるので、ただく閉めてあった>という言い方だと知れた。だから、「しりばかりは」はく端だけは>ではなくく少しの隙も無いほどに＝ピシッと>だ。

「いと若やかなる心地もするかな(是は若者扱いされた気がしますね)。年月の積もりをも(会えなかった年数まで)、紛れなく数へらるる心ならひに(間違わずに数えられるほど貴方を思い続けてきた私に)、かくおぼめかしきは(こうした隠し身は)、いみじうつらくこそ(とても冷たく思えます)」

と怨みきこえたまふ(と殿は尚侍に不満を申しなさいます)。

#### [第五段 朧月夜と一夜を過ごす]

夜いたく更けゆく(夜もたいそう更けて行きます)。\*玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など(庭池のオシドリ鳴き声が)、あはれに聞こえて(柵も厭わず通り遊ぶ自分を冷やかすかに聞こえて)、しめじめと人目少なき宮の内のありさまも(ひっそりと人気のない邸内の様子にも)、「\*さも移りゆく世かな(二十年前に籐花の宴で賑わった右大臣邸も、様変わりしたものだ)」と思し続けるに(と殿は思い続けなされば)、\*平中がまねならねど(嘘泣きが得意な平中の真似ではないが)、まことに涙もろになむ(本当に涙もろくなります)。\*「玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々」は注にく「春の池の玉藻に遊ぶ鳩鳥の足のいとなき恋もするかな」(後撰集春中、七二、宮道高風)を踏まえる。庭の鴛鴦の声が源氏の恋情をいっそうそそる。>とある。「玉藻に遊ぶ」はく藻の間を縫って泳ぐ>。「足のいとなき」の「いとなき」はく暇が無い＝休みが無い＝忙しない>だから、池のニホドリが春らしく元気に泳ぎ回る風景を思えば、明るい陽気な歌のようにも見えるが、それは水面上の絵で、水中の「足のいとなき」はバタついて苦勞する滑稽さも感じる。そして、その滑稽さを自分の姿に重ねれば、自虐的な趣きも出てくる。「足のいとなき恋」はく足繁く通う恋>でもあるだろうが、「恋もするかな」の「も」にく～であっても厭わずに>という決意が込められているとすれば、「玉藻に遊ぶ」「足のいとなき」はく藻が絡んで足を取られてもがく>と愈々の自虐性を見せる。であれば、注の言う「庭の鴛鴦の声が源氏の恋情をいっそうそそる。」と読むよりは、此処の文意はく庭の鴛鴦の声が源氏の恋情をからかう。>と読むほうが楽し



い。引き歌自体の歌意は分からないが、此処の引用に関しては、それでも殿は突き進む、と読みたい。\*「さも移りゆく世かな」は注に＜源氏の心中。右大臣家の推移。右大臣、弘徽殿太后在世中の権勢を誇っていた時代と比較した感想。＞とある。特に二十年前の簾花の宴の時との比較、かと思う。ただし、右大臣家筋の権勢は世代交代して今は左大将家に受け継がれているのであって、決して衰退していない。二条宮邸の廃れは、直接には朱雀院の出家で宮邸保全の院司管理が終わったことに拠る。と、此処に来て符と思う。この尚侍君のような生来の派手な女は、こういう寂れた邸は似合わない。弘徽殿太后は世情不安を右大臣家勢だけでは治め切れずに、源氏一派、その実は左大臣家勢だが、に権勢を奪われることを認めざるを得なかった。が、それでも、自身は朱雀院の母后として威厳ある一生を全うした。が、同系統の派手な文化背景を持つ尚侍君は子も無く、このまま静かに生きる他はない。となると、源氏殿が尚侍君を訪ねるのは朱雀院への裏切りではあるだろうが、実は朱雀院も本音では源氏殿に淋しい尚侍の世話を頼みたいのであり、源氏殿はその意、当然に暗意、を汲んでもいる、という位置付けが作者にはあるようにも思える。確かに、露骨な女通いの体で王家の品位を汚すは以ての外だろうが、その辺も源氏殿なら心得ているだろう、くらいの気持が朱雀院にもある、くらいのこととかも、この三人の間でなら、在り得る話なのかも知れない。\*「平中がまね」は注に＜平中の空泣き。「末摘花」(第二章一段)にも出る。＞とある。末摘巻二章での「へいちゅう」の引き合いは、歌物語「平中」にあるところの、主人公の平中は女の同情を買う為の嘘泣きが得意だったが、そうと知った相手の女が水差しに墨を入れておいて、平中が顔を真っ黒にした、という有名な滑稽譚を前提に、光君が自分の鼻に紅を付けて、紫君に「自分は平中とは違う」とおどけて見せた場面だ。ところが資料考証の専門家によると、その「有名な滑稽譚」自体が今に伝わる「平中物語」には散逸していて、この源氏物語の末摘巻の記事から、逆に当時の「平中物語」にはそうした話が語られていたようだ、と推測されている、ということらしい。話はややこしい。ともあれ、此処の語りでも＜平中は嘘泣きが得意＞という、当時の常識に基づいた語用のようだ。これは軽口調だから、やはり「あはれに聞こえて」は冗句だ。

昔に変はりて(昔と違って)、おとなおとなしくは聞こえたまふ\*ものから(殿は穏やかな口調ではお話しなりつつも)、「これをかくてや(是をこうしては)」と、引き動かしたまふ(御襖戸を引き開けなさいます)。\*「もの」は一定の事柄の現出を示す言い方。「から」は一定の状態に於いて、次に起こる事柄を説明する意図を示す言い方。その説明内容に拠って、出発地点・時点・理由などとなる各一定条件下での「から」は順接にも逆接にもなるのだろう。で、此処では文脈上逆接のようなので、この「ものから」は「ものの」や「ながら」との類語とは思いますが、より臨場性の強い言い方で＜今現にそうで在りつつも＞くらいの語感かと思う。

「年月をなかに隔てて逢坂の、さも塞きがたく落つる涙か」(和歌 34-11)

「たどり着いても逢坂の、関が在っては越えられぬ」(意識 34-11)

\*注に＜源氏から朧月夜への贈歌。「逢坂」と「逢ふ」、「関」と「塞(せく)」の掛詞。「逢坂」と「関」は縁語。＞とある。渋谷訳に「長の年月を隔ててやっとお逢いできたのに、このような関があっては堰き止めがたく涙が落ちます」と分かり易く示されてあって、歌筋はこの場面に丸々はまっている。というより、今の場の全てが「逢坂の関」の洒落言葉に織り込まれている。出来過ぎだ。いや、この歌在り来の「玉藻に遊ぶ鴛鴦の～まことに涙もろになむ」という枕語りなのだろう。意識文が本心かと思う。ところで、「あふさか」の「逢ふ」は＜面對する＞、「坂」は＜勾配地＞を示す語で、湖西と湖東の路が合流して京都山科へ向かう坂道を示すに相応しい命名だ。が、「さか」の語感、「さ」が＜今から事に臨む「いさ」＞で、「か」は＜「かつ」と障害に気を引き締める気合＞なので、「あふさかの」は＜逢うに際して、逢う先に＞という意味をそれ自体の語に持っているように思える。名作都都逸の趣だ。

\*女、 \*「女」は注に<朧月夜の君。恋の場面における呼称。>とある。確かに印象的な表記だ。

「涙のみ塞きとめがたき清水にて、ゆき逢ふ道ははやく絶えにき」(和歌 34-12)

「関の清水は近江路を越すに越せない涙坂」(意識 34-12)

\*注に<朧月夜から源氏への返歌。「塞き」「がたし」「逢ふ」の語句を受け、「涙」を「清水」に、「隔つ」を「絶ゆ」とずらして「道は早く絶えにき」と返す。「逢ふ道」と「近江路」の掛詞。「関」「清水」は「逢坂」の縁語。『完訳』は「源氏の歌を切り返しながらも同じ歌語を多用して共感をも表現」と注す。>とある。「関の清水」は<滋賀県大津市逢坂の関跡付近にあった清水。(歌枕)>と大辞林にある。関屋巻一章三段に「行くと来とせき止めがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ(和歌 16 - 1)」との空蟬の独詠歌があった。「近江」は「近つ淡海」で「逢ふ身」に掛ける言葉らしいが、「逢ふ道(あふみち)」と「近江路(あふみぢ)」の掛詞も常套語用らしい。この歌は、短歌は崩れるが、上に「逢坂の関は」を付けて「逢坂の関は涙のみ」と発句すると、とても納まりが良い文句に私には見える。

などかけ離れきこえたまへど(などと突き放した返歌をお詠みなさったが)、いにしへを思し出づるも(昔が思い出されなさと)、

「\*誰れにより(誰の所為だったのか)、多うは(その多くは)。さるいみじきこともありし世の騒ぎぞは(かつて大変なことになった不倫事件は)」と思ひ出でたまふに(と思い出しなさと)、\*「誰れにより」は注に<以下「世の騒ぎぞは」まで、朧月夜の心中。係助詞「は」反語の意。みな自分のせいで起こったことだ、の意。>とある。であれば、「たれにより」は<誰の所為だったのか>という意味で、下に「しか」が省かれている、のだろう。「多うは」の「おほう」は「おほく」の音便で「多く」は形容詞「多し」の連用形。で、この文は「多うは誰れにより(しか)」を倒置させた言い方、かと思う。更に「さるいみじき~騒ぎぞは」も「ぞ」という述語対象を明示する係助詞を文末に用いた倒置構文で、此处の文は「さるいみじきこともありし世の騒ぎは多うは誰れにより(しか)」という文意の、「誰れにより」という自戒の念を強調する為の言い回し、かと思う。とすると、この尚侍の<自戒の念>とは、仕掛けたのは源氏殿に違いないが、入内が予定されていた身でありながら、その誘いを拒み切らなかった帝への恐れ多さ、だろうか。いや、それでは下の文に繋がらない。下の文は、院の帝を更に裏切ることになるからだ。だから、この尚侍の<自戒の念>は<殿だけが都を退去して苦勞し、自分は都に残って朱雀帝の寵愛を受けた>という、殿に対する<引け目>らしい。さすがに右大臣家の価値観だ。朝廷の統べる身分秩序より、王家を体現する文化素養の方を恐れ多く敬う、という支配者意識が徹底している。観念ではなく日常生活が雲上の人にとって、如何に自分の感性を誇れるかが重要なのであって、秩序維持などは官僚が管理していれば良い、ということなのだろう。隙だらけだが、無防備に振舞ってこそ本物の自由人かも知れない。守られている事にどこまで無頓着でいられるか。私には公人の厚顔は理解出来そうにない。

「\*げに(確かに一方的に不遇な目にお遭わせ申したままなのだから)、今一たびの対面はありもすべかりけり(殿とは今一度の対面はあつて話し合い申すべきかも知れない)」と、思し弱るも(拒み切れなさらぬものも)、 \*「げに」は前項ノートに記した解釈によって、尚侍には殿に対する引け目があるものとして補語する。

もとより\*づしやかなるところはおはせざりし人の(もともと重々しい所がお在りでなかった人が)、年ごろは(この何年かは)、さまさまに世の中を思ひ知り(さまさまに世の中の道理を分別して)、来し方を悔しく(昔の軽率な過ちを後悔し)、公私のことに触れつつ(公式行事でも私的な

事柄でも経験を積んで)、数もなく思し集めて(多数の出来事を考え合わせなさって、支障が出ないように)、いといたく過ぐしたまひにたれど(それはそれは自重して過ごしていらっしやったが)、昔おぼえたる御対面に(昔懐かしい殿との御対面に)、その世のことも遠からぬ心地して(あの頃の華やいだ日々もつい昨日のことに思われて)、え心強くももてなしたまはず(とても頑なにしてはいらっしやれません)。\*「づしやか」はくずしりと重々しい。で、元々が尚侍は軽々しい、という語りらしいが、それを言っちゃあオシマイよ、だ。

なほ(今なお)、らうらうじく(危うげで)、若うなつかしくて(若々しく親しげで)、一方ならぬ世のつつましさを\*あはれをも(一通りではない世間への体面と殿への思慕とが)、思ひ乱れて(思い入り交じって)、嘆きがちにてもものしたまふけしきなど(ためらいがちにしていられっしやる尚侍君の様子などは)、\*今始めたらむよりもめづらしくあはれにて(今はじめて抱いた人よりも深い情愛を感じ入って)、明けゆくもいと口惜しくて(夜が明けるのも惜しまれて)、出でたまはむ空もなし(殿はお帰りになる気が全くありません)。\*「あはれ」は<源氏への思慕>と注にある。\*「今始めたらむよりもめづらしく」は情交場面の描写で、情交があったことの明示だが、それは出掛ける時から確実だった事で、此处に具体的な性愛描写は無い。若い時の性愛描写は、桜花の宴の後の無理強いした初夜でさえ「酔ひ心地や例ならざりけむ(源氏の酔ひ心地はいつに無く耽美に痴れて)、許さむことは口惜しきに(容赦なく思いの丈を奮い勃たせて)、女も若うたをやぎて(女も其れを若い体にしならせて受け応えて)、強き心も知らぬなるべし(正体を失くすまで貪り合った)」(花宴巻一章二段)という肉弾戦ぶりだったが、此处ではひたすら耽美な調子だったようで、口吸いや性器弄りにどれ程の情愛が込められたのかは、互いにそれを深く感じ取ったものとして、理想的だったのだろうと受け止める他はない。

#### [第六段 源氏、和歌を詠み交して出る]

\*朝ぼらけのただならぬ空に(夜が白み始めた美しい朝の空に)、百千鳥の声もいとうららかなり(ウグイスの声も浮かれ気分です)。\*「朝ぼらけ」は<朝がほのかに明けて来る時分>で日の出前の空が白む頃とのことで、「あけぼの」の少し後、とも大辞泉にあるが、何れ短い時間帯の事で「あけぼの」と思っても良さそうだ。「ただならぬ空」は、「ただならず」が<「ただ=直=平準」ではない=趣き深い>なので、ざっと<印象的な空>という言い方かと思うが、訳文の「美しい空」の方が意を得ていそう。\*「ももちどり」は古語辞典に<色々な鳥>とも<千鳥>とも<ウグイス>ともある。大辞泉に<春の季語>ともある。私の個人的印象では、「千鳥」は<磯千鳥>で磯辺に群れるように思えるし、「色々な鳥」では散漫なので、「ウグイス」を想定したい。「うららか」は<春の穏やかさ>だから、暖かさに気が緩む浮かれ気分。

\*花は皆散り過ぎて(花が散り終わった)、名残かすめる梢の浅緑なる木立(庭の葉桜に)、「\*昔、藤の宴したまひし(かつて右大臣がこの庭で藤花の宴をなさったのは)、\*このころのことなりけりかし(二十年前の今頃の事だったんだなあ)」と思し出づる年月の積もりにけるほども(と思い出される今までの年月の長さにも)、その折のこと(当事の事を)、かき続けあはれに思さる(殿は次々と懐かしく御思いなさいます)。\*「花」はサクラの花。「皆散り過ぎて」はサクラが終わった季節、今で言う四月下旬、旧暦なら弥生下旬、を示す言い方だろうが、女を散らした情交後の濃厚な風情を漂わす言い回しになっている。繰り返したが、殿と六姫が初めて情を結んだのは二十年前の二月二十日過ぎの御所での桜花の宴の夜だった。その思い出を、庭の桜の木に重ね見れば「名残かすめる梢の浅緑なる木立」という語りの深い味わいが偲ばれる。\*「昔、藤の宴したまひし」は注に<源氏の心中。源氏、現在四十歳、藤の花の宴は源氏二十歳の時(「花

宴)、二十年前の出来事。>とある。 \*「このころのことなりけり」はく二十年前の藤花の宴がちょうど今頃だった>ということだから、この日が同じ三月二十日過ぎである事を示す。

中納言の君(尚侍君の側近女房の中納言の君が)、見たてまつり送るとて(殿をお見送り申上げるといふ事)、\*妻戸押し開けたるに(妻戸を押し開けたまま縁際の廂に控えている所に)、立ち返りたまひて(中門廊を渡りかけなされた殿は引き返しなされて)、 \*「妻戸押し開けたる」の「たり」をどう読むか。戸を押し開けた<その時>なのか、戸を押し開けた<ままで居る>なのか。渋谷注には、此処の文意を<源氏は先に簀子に出ていて、後に中納言の君が妻戸を押し開けて送りに出てきた。>としてあって、「たり」を<その時>と取っているらしい。与謝野文は「中納言の君がお見送りをするために妻戸をあけてすわっている所へ」とあって、「たり」を<そのまま居る>と取っているようだ。私は与謝野文に従う。

「\*この藤よ(この藤なんだよ)。いかに\*染めけむ色にか(何て深く私の心に染み込んでしまった色なんだろうか)。なほ(それが今なお)、えならぬ心添ふ匂ひにこそ(得も言われぬ心引き寄せる色香を放つなんて)。いかでか(是でどうして)、この蔭をば立ち離るべき(私はこの花蔭の園を去ることが出来ようか)」 \*「この藤よ」は南庭の藤棚を見て言っているのだろうか。花宴巻にも右大臣家の藤が具体的にどのようなものだったのかは記述がない。胡蝶巻では、六条院での描写だが、「ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み(さらには盛りを過ぎた桜もこの庭では今を盛りに咲き誇り)、廊をめぐれる藤の色も(廊下に沿うように張り巡らされた藤棚も)、こまやかに開けゆきにけり(隙間無く咲き始めていました)。」「(一章一段)とあったのが印象深い。この六条院での船樂は四年前の三月二十日過ぎの催しだった。殿は中門廊から東の対に引き返したわけだが、その妻戸が東南角なのか、南西角なのか、庭を見るなら南西角から出たほうが見晴らせそうだし、中門廊にも藤の蔓が垂れていたとすれば東南角でも十分埋もれる。何と言っても藤原家なのだから、藤に埋もれるのは似つかわしい。 \*「染めけむ色」は含みの多い言い回しだ。源氏が藤の色に染まる、ということの政治的意味合いと、この実際の男垂らしと女垂らしのせめぎ合いの色濃い情緒とが重なり合う人間模様は、作者が絶対に外せない視点提示を意図しているに違いない。

と、わりなく出でがてに思しやすらひたり(どうにも帰り難そうに立ち止まってしまわれます)。

\*山際よりさし出づる日のはなやかなるにさしあひ(築山の稜線越しに差し昇る朝日の明るい光が差しして)、目もかかやく心地する御さまの(眩しいほどの殿の御姿が)、こよなくねび加はりたまへる御けはひなどを(この上なく立派に年を重ねていらした御様子などを)、めづらしく\*ほど経ても見たてまつるは(目にも麗しく長年の時を経ても今もなお拝し申し上げる中納言の君は)、まして世の常ならずおぼゆれば(いよいよ殿が普通の人とは違う気がして)、 \*「山際」は築山のわき。『完訳』は「以下、中納言の目と心にそいながら、源氏の華麗な姿態を描く」と注す。と注にある。 \*「ほど経ても見奉る」は注にく中納言の君とは十五、六年ぶりに対面。>とある。密会を手引きしていたのが中納言の君だったのだから、大胆にも右大臣邸に忍び込んで、しかし運も尽きて右大臣に見つかったのが光君 25 歳の秋口あたり。尚侍との逢瀬も其れ切りだし、女房に会うのも当然にそれ以来だ。ただ、その翌年の光君 26 歳の三月二十日過ぎに須磨退去したのだが、須磨での暮らしも落ち着き出した梅雨時に光君は京の女たちに手紙を出して、尚侍には中納言の君宛に差し出した、という記事が須磨巻二章二段にあった。この時の、光君から尚侍への贈歌が「こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼く海人やいかが思はむ」(和歌 12-21)であり、此処でも下に「こりずま」を使った殿の贈歌があるので、先読みは遺憾ながら、目に付いたので自分で参照指摘しておく。「うらのみるめ」は<海の海

松布(ミルメ海草)とく心の美る女との掛詞。「こりずま」はく懲りないままで、性懲りも無く>という意味の戯れ言葉で、「須磨」に掛ければ更に戯れる。

「\*さる方にてても(わが君は殿をこうした夫として)、などか見たてまつり過ぐしたまはざらむ(どうしてお考え申し上げお過ごし為さらなかったのだろう)。\*注に<以下「御名さへ響きてやみにしよ」まで、中納言の君の心中。「さる方」は源氏との結婚を仮想。>とある。敬語遣いからして注に従うが、側近女房にしては事情の理解が浅く思えて、文意が取り難い。なるほど当時の藤氏長者であった右大臣家にしてみれば、朝廷の意向さえ左右出来ただろうが、六姫自身に自分勝手を通す力は無かった。また、既に桐壺院も崩御して光君の後ろ盾も心許無い。それに、尚侍は朱雀帝の寵愛に喜びを感じてもいた。尚侍が宮仕えを退いて光君と結婚するという道は、弘徽殿大後の政略上許されなかったし、心情に於いても互いに生活を支えあう相手としての認識は無く、互いに心身共に風雅に遊ぶ価値観を共有していた間柄で、縁組としては有り得なかった。と、読者は読んで来ただろうし、側近の認識も同じだろうと、私は勝手に思い込んでいた。

御宮仕へにも限りありて(殿との仲が父大臣に知られては、朱雀帝の尚侍として御出仕なさってもわが君への中宮宣旨の御見込みが無く)、際ことに離れたまふこともなかりしを(身分に格別の差がお付きになるお取立ては無かったというのに)。\*故宮の(故弘徽殿大后が)、よろづに心を尽くしたまひ(いろいろと手を回しなさって)、よからぬ世の騒ぎに(好き合っていたらした御二人の仲は、悪評を立てられ)、軽々しき御名さへ響きてやみにしよ(浮名まで世間に知れ渡る事で終わってしまったことよ)」 \*「故宮の方に心を尽くしたまひ」はどういう内容のことを指すのか。この構文は「尽くしたまひ(て)止みにしよ」だから、文意は<故宮の所為で六姫は殿との仲を裂かれた>という恨み節の悪口なのだろう。しかし、この物語は、弘徽殿大后が尚侍を盛り立てて、朱雀院の寵愛を受ける六姫の立場に非難が及ばないように守った、という筋運びだったので、一見すると「心を尽くしたまひ」はそういう気遣いのことかと見間違い易い。が、「たまひ」の敬語遣いは大后の身分に対するものであり、「心を尽くす」自体は<親身になる>わけではなく、良くも悪くも考え抜いて策を講じる>という意味で、その「心」に「御」が無いことからしても、その「心」が有難いものではなく、迷惑だったことを示しているのだろう。中納言の君の見方では、尚侍と源氏殿は相思相愛でお似合いなのだから、添い遂げることこそが幸せなのであり、朱雀帝への宮仕えは不幸だった、ということのようで、是がひたすら姫の幸せを願う侍女の心情だということか。確かに、そういう考えでなければ殿の手引きを勤める筈も無かったのかも知れない。しかし手引きは基本的に、女房自身の考えというよりも、その置かれた人間関係上の立場に拠るもの、に私には思える。むしろ、この女房を今だに側近として重用していることからして、尚侍自身に源氏殿との結婚願望がどうしても絶ち捨て難く残っていた、と思う他は無い。その尚侍の意を女房は汲んでいた、ということなのだろう。つまり是は、尚侍の、ある一面でののだが、本音の代弁だ。

など思ひ出でらる(などと思ひ出されるのです)。

名残多く残りぬらむ御物語のとぢめには(物足りない思いが多く残ってしまいそうなこの日の恋物語の終り際には)、げに\*残りあらせまほしきわざなめるを(本当に次回が待ち遠しくなる上手いことを言いたい所のようなのだが)、御身(殿の御身分では)、心にえまかせたまふまじく(思うように忍び歩きも出来ず)、ここの人目もいと恐ろしくつつましかれば(多くの人目が恐ろしく憚られるので)、やうやうさし上がり行くに(次第に日が昇って明るくなって行くと)、心あわたたくして(気が落ち着かず)、\*廊の戸に御車さし寄せたる人びとも(侍所に控えていて中門廊の妻戸口に御車を寄せ付けた殿の従者たちも)、\*忍びて声づくりきこゆ(咳払いしてお帰りを促し申し

上げます)。 \*「\*残りあらせまほしきわざなめるを」は<続きが在って欲しい所のようなのだが>という言い方に見える。が、この「わざ」は「御物語のとちめには」という戯れた言い回しを受けているので<気の利いた文句>という意味が既定されている。と、「続きが在って欲しい<気の利いた文句>」ということ、言い回しは捨てて意味だけで整理すると<次回を期待させる上手い文句>になりそうだ。 \*「廊の戸」は注に<中門廊の妻戸口。>とある。 \*「忍びて声づくりきこゆ」は<源氏の注意を喚起するための咳払い。>と注にある。

人召して(殿は従者に言い付けて)、かの咲きかかりたる花(その近くの咲き掛けの藤の花を)、一枝折らせたまへり(一枝折らせなさいました)。

「沈みしも忘れぬものをこりずまに、身も投げつべき宿の藤波」(和歌 34-13)

「こりずまに 宿の藤波 一泳ぎ」(意識 34-13)

\*注に<源氏から朧月夜への贈歌。「こりずま」と「須磨」、「藤」と「淵」の掛詞。朧月夜を藤の花に喩える。『集成』は「こりずまにまたも無き名は立ちぬべし人憎からぬ世にし住まへば」(古今集恋三、六三一、読人しらず)「恋しさに身を投げつべし慰むることに従ふ心ならねば」(興風集)を指摘。『完訳』は「あなたゆえに流離の逆境に沈んだのに、性懲りもなくまた、淵ならざるこの邸の藤に身を投げたい。朧月夜への執着」と注す。>とある。この物語ならではの、良く出来た歌、という印象だ。『集成』に参照指摘された古今集の歌は「こりずま」と「住まふ」が掛かっているようだが、「住まふ」に「須磨」が掛かっていないなら漫然とした印象なので、多分掛かっているのだろう。が、「古今和歌集の部屋」サイトを頼っても「題知らず」の「読み人知らず」で手応えは無い。

いといたく思しわづらひて(とても深く思い詰めたように)、寄りゐたまへるを(戸口に寄り掛かっていらっしゃる殿を)、\*心苦しう見たてまつる(中納言の君は御労しく拝見申し上げます)。\*「心苦しう見たてまつる」は注に<主語は中納言の君。>とある。確かに敬語が無い。

女君も(抱かれた尚侍君も)、今さらにいとつつましく(今また改めてとても慎ましやかにして)、さまざまに思ひ乱れたまへるに(朱雀院と六条院の間で心が揺れ動くが)、花の蔭は(華やかな源氏殿の胸に顔を埋めるのは)、なほなつかしくて(やはり馴付きたくて)、

「身を投げむ淵もまことの淵ならで、かけじやさらにこりずまの波」(和歌 34-14)

「こりずまと 言うも溺れぬ 藤の波」(意識 34-14)

\*注に<朧月夜の返歌。「身を投ぐ」「こりずま」「藤」「波」の語句を受けて、「真の淵ならでかけじやさらに」と切り返す。「淵」と「藤」の掛詞、「藤」と「波」は縁語。『完訳』は「本当の淵でもない藤波の淵に袖を濡らすまい、と切り返す一方で、源氏の歌の語を多用して共感をもかたどる」と注す。>とある。

いと若やかなる御振る舞ひを(まるで若人のようなお振る舞いを)、心ながらもゆるさぬことに思しながら(自分でも許されないことと思いなさりながら)、関守の固からぬたゆみにや(女の一人暮らしで男主人が居らず門固めが堅くないのを良いことに)、いとよく語らひおきて出でたまふ(殿は尚侍を言い包めては再会を約束してお帰りになります)。

そのかみも(その昔も)、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしながら(他の女以上に気に掛けて恋しく思いなされた尚侍への御執心ながら)、\*はつかにてやみにし御仲らひには(途中で終わった御間柄であれば)、いかでかはあはれも少なからむ(どうして感慨の浅いことがあります)。 \*「はつか」は<わずか>。だが、光君 20 歳から 25 歳までの五年間は窮屈ではあっても付き合った。仮に六姫が三歳年下だとすれば、17 歳から 22 歳であり、互いに人生設計の基本形成期を費やしたわけで、決して短い期間とは言えない。では、この「わずか」とは何か。結局、遊びに終わった、ということか。いや、それが遊びでは済まない相手だと互いに高く評価し合った仲にも関わらず、遊びに終わった、という中途半端さ、二人の形を作れなかった無念さ、悔しさ、かと思う。

### [第七段 源氏、自邸に帰る]

いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ち受けて(とても静かに部屋に入っていっしやる寝乱れ姿の殿を待ち受けて)、女君(紫夫人は)、さばかりならむと心得たまへれど(相手は尚侍君あたりだろうとお分かりだったが)、おぼめかしくもてなしておはす(情交の後で着衣を整え直しなされた殿の様子には気付かない振りで、常陸君への御見舞いにご苦労様でしたと惚けてお迎え申しなさいます)。なかなか\*うちふすべなどしたまへらむよりも(殿は浮気後の帰宅が隠しようも無いので、むしろ夫人が不機嫌でいっしやるよりも)、心苦しく(こうしたお惚けに気が引けて)、「など、かくしも見放ちたまへらむ(どうして、これほどに見放した態度をお見せなさるのか)」と思さるれば(と夫人の心の隔てを感じなさらずには居られず)、\*ありしよりけに深き\*契りをのみ(以前から聞かせていた女通いの出来事の話とは違って、この日は二人の間の深い夫婦の縁というものを)、\*長き世をかけて聞こえたまふ(今までの長い間にわたる事柄の意味付けを以て説明申しなさいます)。 \*「うちふすぶ」は<ブイと機嫌を悪くする>。「ふすぶ」は<くすぶる、煙を立てる、燃え残る、根に持つ>で<不機嫌になる、嫉妬する>と広がるようだ。で、夫人が<不機嫌になる>のが当然だ、と判断するという事は、源氏殿は浮気で上気した余韻が隠しようもないことを自覚していた、ということらしい。 \*「在りしより異に」は伊勢物語二十一段にある言い回しを真似た表現、との指摘が注にある。この伊勢物語二十一話に付いては、確かに本物語の此処の話の下敷きになっているようであり、且つ読者がその二十一話全体を理解していることが前提となっている作者の語りなのであり、且つその二十一話に対する今日での定説らしき解釈が、意外にも問題がある、と私は思うに至ったので、この二十一話の解釈の事および此処の語りの落語調の軽口めいた滑稽譚というかバレ話の類の卑猥講談の味わい、に付いては此処の話のオチが付いた後で、まとめて所感を記す事にする。で今は、この「在りしより異に」が直接には何を指しているのかを見ておく。で先ず、「在りしより異に」自体の語意は<以前とは違って>だが、此処で言う「以前」とは何を指すのか。「深き契りをのみ」は「異に」である今の対象指示なので、この文の述辞である「長き世をかけて聞こえたまふ」ことではあっても、「深き契りをのみ」とは違う面の話、ということになる。「長き世を掛く」は<長い期間に渡る>で、殿は長い物語で何かを説明した、ように見える。で、「世」は女性関係との複意だろうから、他の女との経緯を殿は上に話して聞かせた、ということになりそうだ。殿は事ある毎に、上には口が軽く、というか許して貰えるという甘えから、あなたには隠し事がしたくない、などと言いながら、自分が気楽になりたくて、相手の女のことを打ち明けてきた。その中でも、此処の場面に繋がる物としては、八年前になる朝顔卷三章での、藤壺入道宮と朝顔君と尚侍君と明石君との人物評をまとめて述べていたことが、特に印象的だ。殿は何も上に、藤壺入道宮との密通を明かしたわけではないが、入道宮と紫の上が「紫のゆゑ」(朝顔卷三章三段)という血筋に当たることを強調していたのは、ずいぶん暗示的だ。 \*「ちぎり」は<夫婦の縁、添い遂げる宿縁>。様相としての男女の仲を言う「世」とは違う概念のようだ。尤も、紫の上も子を儲けていないので、客観的には「宿縁」が証明されていないから、是は殿の主観としての思い、ということなのだ

ろう。やはり、少なくとも源氏殿の方は、尚侍君を「契り」の対象として考えていなかった、という作者の設定だと読者は思っただけさそう。また、「のみ」はこの場合、限定の「～だけ」の意ではなく、強調の「それ自体、～というものこそ」という言い方だろう。\*「長き世をかけて」は分かり難い。が、語意については「在りしより異に」の項でも既に見たし、下の「尚侍の君の御ことも、また漏らすべきならねど」の「また」が「在りし」に対して「更に改めて」であるとすれば、以前に話した事のある「数々の女性遍歴」のことではありそう。つまり、殿は紫の上には既に多くの事柄を話して来ていたかと思うが、「契りをのみ」という意図に於いて此処で改めて「聞こえたまふ」たのだから、この「長き世をかけて聞こえたまふ」は、自分と紫の上との関係だけは特別な縁だと説得する為に、殿は他の女との間の「今までの長い期間での自分の行状を説明した」もの、と文意を理解する。

尚侍の君の\*御ことも(尚侍君との間に復活させた情事のことも)、また漏らすべきならねど(新たに他言すべきではなかったが)、いにしへのことも知りたまへれば(上は右大臣家での露見騒動に至る昔の二人の遊び相手という間柄を、すでに殿から聞き置いてご存知だったので)、\*まほにはあらねど(ありのままでは無いが)、\*「おおんこと」は与謝野訳に「復活させた情事」とある。的確な補語と敬意して従う。\*「まほ」は「真帆・真面」で「正面から帆にいっぱい風を受ける→全面的に→丸々全て」。

「物越しに、はつかなりつる対面なむ(几帳越しの短い対面でしたので)、残りある心地する(物足りないものでした)。いかで人目咎めあるまじくもて隠しては(なんとか人目につかないように隠れて)、今一たびも(もう一度会いたいものです)」

と(と殿は上に)、語らひきこえたまふ(話して聞かせ申しなさいませ)。

うち笑ひて(すると上は思わず笑って)、

「\*今めかしくもなり返る御ありさまかな(現役を取り戻したような殿の御胤付け振りですこと)。昔を今に改め加へたまふほど(そうした昔の恋人に今になって新たな興奮を覚えて情交を重ねるという御話しは)、\*中空なる身のため苦しく(臆内に男根を迎えず空いている私には辛いもので)」\*「今めかし」は、良く言えば「新味があって洒落ている、気が利いている」で、悪くは「浅はかだ」など古語辞典にはある。が、此処では文字通り「今向く＝直面する＝実行する＝現役で働く」という意味かと思う。何の「現役」かと言えば、目交わいでちゃんと勃起して挿入すること、だ。\*「なかぞら」は「手応えのない空虚感」で中途半端な気分を表すこともあるだろうが、此処では「情交の御無沙汰」を意味する。というのは、此処の語りが伊勢物語二十一段を下敷きになっているからで、その二十一段が全くの下ネタ話だという認識が当時の読者にあってこそ成立するオチになっているモノだからだ。そうでなければ、「うち笑ひて」の「て」で上が殿の若やぎに華やぎを感じてこの冗句を誘発された場面運びが説明できないし、更に下の「さすがに涙ぐみたまへる」の語りで作者が仕掛けた泣かせが浮く。私は先に、この伊勢物語二十一段の解釈を整理したい旨は「在りしより異に」の項目で断ったが、此処で私見を展開する。ただ、私見と言っても、私が考え出したものではなく、基本的には「帯とけの伊勢物語」サイトの当該ページにある解説が非常に説得力があり、それに乗っかったに過ぎない。が先ずは、この二十一段の原文とされるものと現代語訳との対比で、多くの解説サイトで「家を出たのが「をんな」と解釈されていることに私は座り込まざるを得なかったし、「帯とけの伊勢物語」サイトに「家を出たのは「を」とこ」とされていることに素直に納得できた事から、同ページに展開されていた当該のより詳細な理解へと誘われた。この二十一段には七首の歌が盛り込まれていて歌物語の面目躍如の感だが、むしろコノ手の、とは下ネタの、歌詠みの解説書の趣と言うべきかも知れない。先ずは、家出した男が書き置いた「出て去なば(いでていなば)心軽しと(こ



ころかるしと言ひやせん(いひやせん)世の有様を(よのありさまを)人は知らねば(ひとはしらねば)」「伊勢物語 21-1)は、一般的な男と女の擦れ違いのような曖昧な表意の裏に<射精した男は素っ気無く成ると責め立てるのは男の生理を女が知らないからだ>という具体的な内容を持つ。そして、残された女の「思ふ効(おもふかひ)無き世なりけり(なきよなりけり)年月を(としつきを)徒に契りて(あだにちぎりて)我や住まひし(われやすまひし)」「(同 21-2)は<無駄に暮らした>という表意の裏に<存分に女性器を濡らせない男の早漏に形ばかりの性交を何年もして来た>という女の実情。「かひ」は「貝=女性器」。「としつき」は<疾し尽き=早漏>。「すまふ」は「住まふ」とは別に「相撲=争ふ=体を組み合わせる=組んず解ぐれつ=交尾する」。そして、物思いに耽る女を客観情景として形容する地文歌の「人はいさ思ひやすらん玉かづら(女は遣る瀬無く簪に手を遣り)おもかげにのみいとど見えつつ(男を偲んで思いを募らせていた)」「(同 21-3)は<女は仕方なく張り子で自慰をして男を懐かしんでいた>。それでも女は堪らずに男に送った未練の手紙の「今はとてわするゝ草のたねをだに(さようならと言ったからといって私を忘れさせる他の女が)人の心にまかせずもがな(あなたを夢中にさせることが無いで欲しい)」「(同 21-4)は<忘れ形見の子種も無いなら下手な貴方に性戯を任せなければ良かったわ>と、「悩みの種を蒔く」に「胤付けを男に任せる」を洒落る。男の返事の「忘れ草植ふとだに効く物ならば(昔の女を忘れさせる新しい女が別れた途端に現れるなら)思ひけりとは知りもしなまし(忘れたことも忘れるだろうに)」「(同 21-5)は<子宝が必ず授かる畑なら射精はしたんだから男の上手い下手は関係ないだろう>ということで、以前にも増して激しい罵声の応酬。更に、まだ言い足りない男は捨て台詞に「忘るらんと思ふ心の疑ひに(忘れられるのだろうという貴方の疑いが)ありしよりけに物ぞかなしき(一緒に暮らしていた時以上に物悲しい)」「(同 21-6)と愛想尽かしをして見せるが、その実は<子種が無いと言われては我が一物が情けない>と虚勢を張る。ところが、女の返事の「中空にたちある雲のあともなく(自分の心象風景には中空に浮かぶ雲さえ無い空しさで)身のはかなくもなりにけるかな(寂しくてしょうがない)」「(同 21-7)は<子宝も無く膺が干上がっては生きる意欲も持てません>と一気に真顔で、男の関心が専ら性戯であることと、女の関心が妊娠であることとの意識のズレが下ネタの中に浮かび上がる。だから、此処の語りに当時の読者はさぞ大笑いしたのだろうと楽しくなるが、面白うてやがて悲しきの趣きでもある。そして現実には、子供が産まれれば、男の無邪気な性欲は放置されて、女の生活の軸は子育てに移る。子宝の無い虚無感は、やはり女の方が切実なのだろう。尤も、伊勢物語の女は虚無感に堪えられず他の男と一緒にになり、男も別の女とくっついた、という軽妙な艶笑譚で結ばれているが、紫の上には他の男と一緒にになる選択肢は無いので、事態はより深刻かも知れない。

とて(と伊勢物語二十一段の艶笑譚に準えて道化するものの)、さすがに涙ぐみたまへるまみの(その話の子宝に恵まれない手応えの無い女の人生に自分の身を重ねれば、さすがに涙ぐみなさる目元が)、いとらうたげに見ゆるに(とても可憐に見えるので)、

「かう心安からぬ御けしきこそ苦しけれ(そのように心を閉ざす貴方の態度が辛いのです)。ただおいらかに引き抓みなどして(貴方が私の最愛の妻なのは変わらないのだから、ただ大様に構えて抓ったりして)、教へたまへ(私の浮気心を大人気無いと叱って下さい)。隔てあるべくも(私は貴方を疎遠には)、ならはしきこえぬを(して来なかった心算なので)、思はずにこそなりにける御心なれ(心外な貴方の余所余所しさです)」

とて(と言って殿は)、よろづに御心とりたまふほどに(何とか上の御心を取り成そうと為さる内に)、何ごともえ残したまはずなりぬめり(尚侍との逢瀬を洗い浚いお話し申してしまわれたようです)。

宮の御方にも(殿は姫宮の御部屋にも)、\*とみにえ渡りたまはず(失礼にも日中はお渡し申し為され得ず)、\*こしらへきこえつつおはします(自室で上をなだめては過ぎしなさいます)。姫宮は、何とも思したらぬを(姫宮は殿が見えないのを何ともお思いにはなりなさらなかったが)、御後見どもぞ安からず聞こえける(お世話役の女房たちが不平を申します)。わづらはしうなど見えたまふけしきならば(姫宮が不機嫌そうに見えなさる様子ならば)、そなたもまして心苦しかるべきを(新妻なので上にも増して浮気夫は立場が無い所だが)、おいらかにうつくしき\*もて遊びぐさに思ひきこえたまへり(夜になってから実際に御会い申しなされば、殿は宮を屈託の無い愛らしい遊び相手に思い可愛がり申しなさいます)。 \*「とみに」は「頓に」と表記され<急に>という意味に古語辞典で説明されるが、この語が漢字の「頓」から来ているものなら、「頓」は大辞泉に<頭を地面につけて礼をする。ぬかずく。>の意と説明があり、礼を以て尊敬の念を示す、という語感がありそうだ。ということは、その打消し文が意味するところは、礼を失する、失礼にも、ということであり、日中は自室から女宮の御部屋にご機嫌伺いするのが当然だ、という礼儀認識が当時の人に在った、ということに基づく語り、のように見える。では、むしろ「急に」という意味合いは何処から来るのだろうか。どうも「頓」には<圧力で強制された状況でその場を凌ぐ>や<混み入った問題を集中して解く>ような有効な即応力が含意されているような気がして、その語感が<急に、直ぐに、簡単に>という意味に繋がるように見える。いや、根拠は無い。また、簡単には根拠を調べる手掛かりも見つからない。是はただの愚痴だが、私としては出来れば作者には、こんなややこしい語を使って欲しくない。 \*「こしらふ」は<形を作る→格好を付ける→相手を納得させる→宥め賺す>。 \*「遊び種」は宮に対して大胆な性描写。